

# 鉄筋工

## 桃原和希

鉄とコンクリート、それぞれの長所を併せ持つ構造、鉄筋コンクリート構造。コンクリートを打ち込む前に、内部構造として網目状に組み立てるのが鉄筋である。施工後は隠れて見えなくなってしまうが、その不良がビルやマンションなどの建物や橋梁、トンネルなどの構造物の構造耐力に影響するため、極めて正確な施工が求められる。それを担うのが鉄筋工だ。

### 父は設備工事、息子は鉄筋工事に

鉄筋工・桃原和希は、一九八五年、沖縄に生まれた。中学を出てしばらくはさまざまな職を経験し、二〇歳の時に上京、鉄筋施工会社「砂川鉄筋」に入社した。

「最初から鉄筋工になろうっていう気はなかったんですけど、父親が自営の設備工事業者をしていたので、その関係の仕事に就こうかなと。子供のころから仕事を手伝ったりして、その時に設備工事と鉄筋工事って絡む仕事が多いんで、見ててカッコいいなと思ってました」  
ビルなどの建物に使われるコンクリートには、

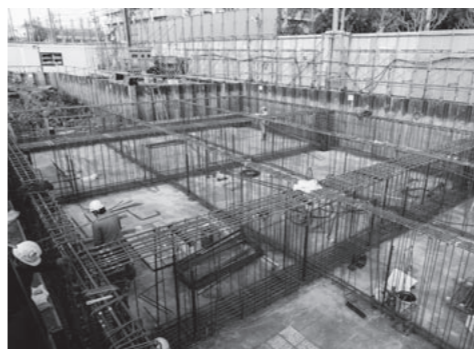
「圧縮に強く、引っ張りに弱い」という特性がある。その引っ張りに対する弱さを補強するために材料が鉄筋であり、つまり鉄筋工事はコンクリート構造物の基礎から躯体までの強度を担う重要な工程と言える。

「とにかく東京の方がスケールの大きい現場でデカイ仕事ができると思って。仕事も資格も、会社に入ってから身につけたね」

「最初は右も左も、話してる内容もわからなかったんですけど、しばらくしてから意識が変わった気がします。とにかく周りの同僚も、他の会社の人もしっかりしてて、何か間違っていたらすぐ正してくれたんで。作業の段取りなんかはその都度頭に入れておかないと、質問されて答えることもできないし、他職とのコミュニケーションもちゃんと取っておかないといけない。そういうところから学んでいきました」

### 複雑な図面、多種多様な部材、そして工程

鉄筋コンクリート造の場合、当然ながら、柱、梁、壁、スラブなど、躯体のありとあらゆる場所に鉄筋を施工することになる。鉄筋自体も



左/基礎工事が始まった現場の様子。建物の巨大な荷重を支える基礎梁部分に鉄筋が組まれていく。  
中/現在、桃原が働く現場、草加松原団地。中規模の集合住宅が立ち並ぶ大規模な住宅団地。  
右/左から、新妻鋼業・江口広樹工事課長、桃原、鴻池組・河原副所長。「労働環境を整えていただいているので、誰とも話しやすいし、仕事しやすい現場です」

# KEEP

守り、伝えること

「段取りも他職とのコミュニケーションも、スムーズな工事に不可欠」







## 現場のプロフェッショナル KEEP & CHANGE

「主筋」「帯筋」「あばら筋」など用いる場所によって名称・形状ともさまざまであり、また径の太さによっても細かく分類される。一つ間違えれば基準を満たさない欠陥建築に直結するため、搬入された鉄筋のどれをどこに施工するのか把

握するだけでも重大な責務となる。  
「まず図面を見て、どこにどんな太さ、形の鉄筋を何本使うか、荷受けした加工鉄筋をどこに降ろすか確認して…鉄筋に関しては、『ここはこれ』『これはここ』と、ところどころ前もって

頭の中で組み立てる。部分的にですけど」

図面に書かれているのは、「どの部分にどういう鉄筋を何本施工するか」であって、手順までは指示されていない。手前から組むか、奥からか…その効率的な段取りを考えるのも役割だ。「建物の用途によっても、納まりとか鉄筋の本数が違う。例えば警察署なんかだと、災害に強い建物じゃなきゃならないんで、住宅よりも基礎の鉄筋が多い。その分納まりが難しくなりますね」

### 鉄筋工Ⅱ鉄の塊を扱う仕事

鉄筋というのは文字通り鉄でできた部材であり、その重量たるや、一本が二〇〜三〇キに及ぶこともある。

「体力は絶対必要ですね。どれだけクレーンが小回り大きくようになって、仮置き場所から組む場所までは人が運ぶし、細かい調整もしなきゃならないので」

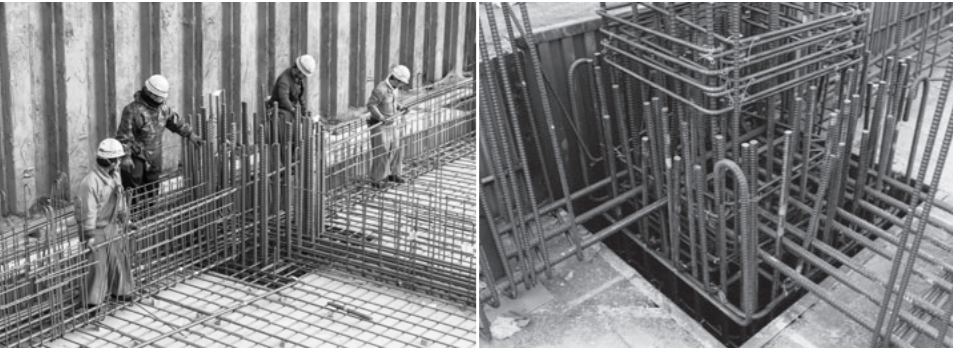
「夏、外に置きっぱなしになってると、ものすごく熱くなります。担ぐと肩を火傷するくらい。でも組み上がって『キレイに納まった』って言われたらうれしいし、地組みしたのがうまく入った時は気持ちいいです」

現場を統括する鴻池組・草加松原団地二期2BL（東街区）住宅建設工事の河原正英副所長

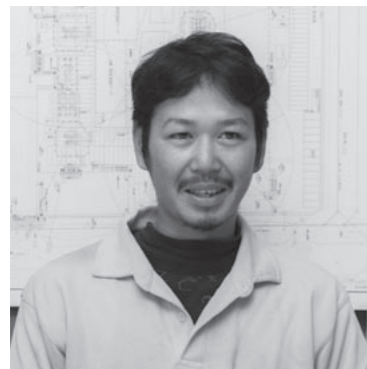
は、「作業員の中では若手の部類だけど、重要な検査にはきちんと立ち会ってくれるのでありがたい存在ですね。けっこうシビアなことを言われるので敬遠する人も多いんですが、自分自身で直接声を聞く方が、結局後々の手直しが少なくなるっていうことをわかってるんでしょう」と、その立ち回りの良さに感心する。

体が資本の体力仕事であり、屋外の仕事がほとんどなので、暑さ・寒さにも耐える必要がある過酷な労働環境だが、桃原は明確な将来を描いている。

「いずれはもっと高層マンションも手がけたいし、現場の中でも重要なポジションなんですね。若い人にもどんどん入ってきてほしいですね。将来的には、独立して自分で人を動かしてやりたいです」



左/この現場では7人の作業員を束ね、工程を指示することもある。  
右/柱と梁が交差する部分は特に鉄筋が混み合って複雑になるので、既定の本数を納めるため、鉄筋工の段取りが重要になる。



とうばる・かずき◎1985(昭和60)年、沖縄県生まれ。設備工事の会社を営む父の仕事を手伝ううちに鉄筋工事に興味を持ち、20歳で上京して砂川鉄筋に入社。主に住宅の現場に携わりながら鉄筋工としての技術を身につけ、現在に至る。鉄筋施工技能士2級取得、玉掛技能講習修了、職長・安全衛生責任者教育修了。